

棚田

ライステラス

全国棚田(千枚田)連絡協議会

第27号 2002.11.5
 (季刊・年4回発行)
 発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会
 編集/ふるきやらネットワーク
 〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202
 TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-0078
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

会場の鴨川市民会館にて。開会式のような様子。ステージは、版画家 土屋金司氏の指導のもと、千葉未来高校のみなさんによる作品で飾られた。



第8回 全国棚田(千枚田)サミット 千葉県鴨川市にて開催

～棚田と都市・
 保全と共生～

全国から、1日目1100人、
 2日目1000人、3日目1200人、
 のべ3300人が参加!!



大山千枚田をめぐる参加者。サミットのテーマ・「保全と共生」の文字が、田植え時に植えられた紫米の稲によって、黄金色の田んぼに浮かび上がっていた。



1日目の夜に開かれた交流会のステージでは、地元芸能が披露された。

特別記念講演 千葉県知事 堂本暁子
「田んぼは生物多様性の宝庫」



堂本暁子氏は、まず、地球誕生の歴史を皮切りに現代が、最も生物の多様性な時代であると説明。それが、急速な勢いで減少している危機を訴えた。そして「田んぼ

棚田を守ることは、生物の多様性を守ること

はまさに、生物多様性そのものの宝庫」であると話し、棚田の「ミニダム」や「ミニ干潟」機能を評価し、日本の農業の優れた特性を称えた。「日本人の知恵によってつくられた、第2の自然である棚田や田んぼを守らなければ、生物は絶滅する。生態系を石垣に例えれば、人間も石垣を構成する一つ。大きな石はゾウ、小さな石はトキ、砂は微生物。その砂がいま、さらさらと流れ出ている」。棚田を守ることは、地球全体の生態系を守ることだと語った。

全国棚田(千枚田)連絡協議会
総会・首長等会議、開会式

1日目、8月30日(金)、理事会終了後、総会が開かれた。挨拶では、文化庁主任文化財調査官、大島暁雄氏が、「棚田が名勝指定になってきたが、外からの評価だけでなく、棚田地域の人たちが自ら価値を見つけていくことも必要。外と内という両サイドからの保全に期待したい。そのためにも文化庁として、棚田調査の支援をして



いる」と熱いエールを投げかけた。

そして、首長等会議では「棚田保存会と交流ができるツアーをセッティングしてほしい」という声のほか、「合併問題で課題は？」といった問いかけに対し、佐賀県相知町長、大草秀幸氏からは「大きな市と合併すると、伝統文化など個性をいかに大事にしていくかが課題」と出たほか、福岡県浮羽町長、堀万治氏からは「過疎や僻地指定がなくなり、財源確保が厳しい。水源税など主張していきたいが、状況は厳しい」と意見が出た。

開会式の挨拶では、農林水産大臣政務官、宮腰光寛氏の、棚田を実際に見てきての「棚田農業特区を検討したいと感じた」という言葉に、会場から拍手が沸くなど、第8回全国棚田サミットは、力強く幕を開けた。

1
日目
8/30
(金)

事例発表 I, II, III

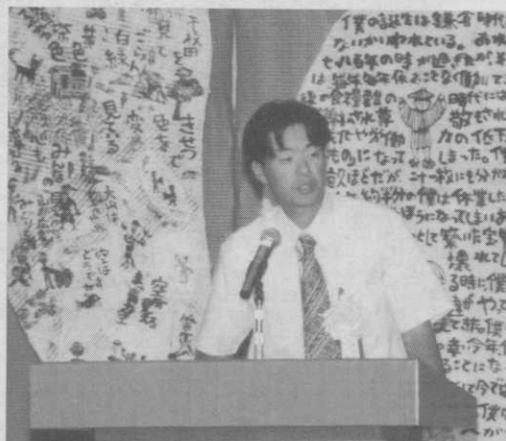


東京から一番近い棚田、「大山千枚田」で知られた千葉県鴨川市で、8回目の全国棚田(千枚田)サミットが開催された。テーマは「棚田と都市・保全と共生」。1日目は、特別記念講演をはじめ、事例が3地区から発表され、充実したスタートを切った。

- I 「千葉県大山千枚田の保全」
- II 「徳島県上勝町八重地のほ場整備」
- III 「福岡県浮羽町棚田米の販売」

3本の事例発表は、参加者たちの関心を大いに惹きつけた。最初は、地元「千葉県大山千枚田の保全」として、大山千枚田保存会会長石田三示氏が発表。都市住民を巻き込んだ保存会の発足から、棚田オーナー制度など活動実績を披露した。そして棚田保全には、都市との共生、交流が不可欠と強調した。

2番目の発表は、徳島県池田農林事務所、川崎陽通氏による「徳島県上勝町八重地のほ場整備」。むかしながらの景観や地域の雰囲気壊さずに行った、ほ場整



上：「徳島県上勝町八重地のほ場整備」を発表する川崎陽通氏。
下右：千葉県大山千枚田保存会会長の石田三示氏。
下左：福岡県浮羽町役場の滝内宏治氏。



備の考え方・手法を報告した。棚田景観を守り、生産効率を上げていく新しいほ場整備の方法は、大きな提案となった。

3番目は、「福岡県浮羽町棚田米の販売」を演題に、浮羽町企画財政課、滝内宏治氏による棚田米販売の成功事例報告が行われた。「耕作継続には、米の単価を上げ、営業が必要」という明快な本音と行動実績は、会場をうならせた。

① オーナー制度の運営と棚田

コーディネーター 早稲田大学教授 中島 峰広



地域づくりの可能性、
そして方法、プロセスを議論

分科会①は、棚田地域で続々と立ち上がっている「棚田オーナー制度」がテーマとなった。事例報告を静岡県松崎町の高橋和泉氏から受け、オーナー制度の実施、継続のための課題について、互いに全国の事例を出し合いながら議論を深めていった。課題は、地元住民の意識づけ、受け入れ組織、オーナーの募集、具体的な作業内容、交流の仕方、といった5つに整理された。そこには、オーナーと地元両者のメリットが必要で、話し合いが重要という反省も出た。

③ 米流通と棚田米

コーディネーター 高崎経済大学教授 吉田 俊幸



棚田米販売は、交流によって
直売の枠を越えたネットワークを

分科会③は、CRF(12軒の米小売のグループ)の松丸昇氏を迎え、消費者が何を求めているのかという話題提供があった。そこから棚田米の販売、流通に向けての議論がなされた。結論として、消費者の口に入るためにも、棚田米の生産を持続させ、流通戦略を練る必要があること。さらに高品質の米をつくる各産地の努力、またコンセプトが必要であることを確認。そして、オーナー制度などによる交流によって、直売の枠を越えたネットワークづくりが必要と話はまとめられた。

2日目(8/31)分科会

② 地域づくりと棚田

コーディネーター 東京農工大学教授 千賀裕太郎



農業体験交流型の
棚田オーナー制度を分析

分科会②は「地域づくり」がテーマ。3者から話題提供がなされた。1つ目は、新潟県安塚町助役、丸山新氏から、自らの集落で行った地域づくりについて。2つ目は東京農工大学農学部研究生の中島正裕氏から、「地域づくりの評価診断基準」について。3つ目は、大山千枚田保存会会長、石田三示氏から、都市住民を入れた組織のつくり方、多様な人の参加を可能にしてきたやり方が報告された。これらをもとに、地域づくりの可能性、その方法論やプロセスが議論された。

④ 環境教育と棚田

コーディネーター 東京学芸大学教授 小泉 武栄



棚田は、総合学習や
環境教育の格好の場

分科会④は、話題提供者に教育学修士で、棚田関連の研究を進め、一児の母でもある秋本洋子さんを迎えた。そして、棚田での教育が総合的な学習としても、いかに魅力的か語り合われた。棚田は、1枚の面積が狭く、農業体験がしやすく、達成感が得られやすい。生きものが豊富にいる。里山全体を知ることが出来る。誰がいつ頃つくったのかと興味がわく。文化財として、歴史的、郷土遺産としての価値を知ることができる。国土、環境保全の機能がある…など、棚田での学びの可能性が探られた。

今年の棚田サミットのメインは、10テーマに分けられた分科会であった。2日目の朝9時〜12時の3時間、それぞれが関心のあるテーマに参加した。市内ホテルを中心に5施設10会場に分かれ、なかには1000人を越える人が参加した分科会もあった。どの会場も熱気にあふれ、白熱した議論が展開された。

5 生物多様性と棚田保全

コーディネーター 宇都宮大学教授 水谷 正一



棚田や谷津田の環境は、いままも多様な生きものを育んでいる

分科会⑤では、東京農工大大学院生の柿野巨氏から「谷津田の環境と生物相の調査」、農村環境整備センター中道明氏から「田んぼ周辺の生きもの調査」結果が話され、耕作放棄率が低いところほど生物相が豊かであること、絶滅危惧種も田んぼでは多く確認できた報告等があった。その後、各地域の、生きもの情報や実施された調査も話題に。地元大山千枚田では、オオサンショウウオの生息が確認され、新潟県安塚小が行った平地の田と棚田の比較で、数も種類も棚田の方が豊富だった事例が出た。

7 棚田のほ場整備

コーディネーター 信州大学教授 木村 和弘



使い勝手を良くしてこそ、耕作が続けられ、保全ができる

分科会⑦は、岐阜県恵那市の坂折棚田のほ場整備を手がける、緑資源公団の杉山行男氏が、恵那市の事例を報告した。棚田の保全という点、未整備のものをイメーজする人が多いが、使い勝手の良い棚田にするために、整備は欠かせないと強調。保全と整備との対立を解消する合意の必要性、棚田での整備工法の特徴などが話された。農地が荒れば、定住ができない。住むためには、使い勝手が良く、労働の危険度を軽減できる農地を考えなければならぬ、と議論はまとまった。

分科会

どの会場も、コーディネーターを中心に、話題提供者が、事例や課題を投げかけ、各参加者たちが意見交換をし、議論が進められた。分科会終了後、メイン会場において、コーディネーターが、各10分ずつ分科会報告を行った。

6 ボランティアと棚田

コーディネーター 農政ジャーナリスト 岸 康彦



棚田保全は、ボランティアとの協働で目的をもち、コーディネーターも必要

分科会⑥は、熊本県水俣市久木野のむらおこし施設「愛林館」館長、沢畑亨氏が話題提供者であった。ボランティアなしでは、棚田保全はむずかしい。ともに働く「協働」が必要と議論が進んだ。さらにボランティアは、初心者からセミプロ級まで多様で、目的も異なるゆえ、つなぎあわせるコーディネーター等の必要性も説かれた。ボランティア・グループの継続、拡大もむずかしく、目的を明確にすることが重要であると確認され、リーダーの後継者づくりの必要性も議論された。

8 「田舎暮らし」の現実と課題

コーディネーター ㈱インサイダー編集長 高野 孟



食と農に、自らたずさわったライフスタイルをつくってほしい

分科会⑦の話題提供者は、(社)農山漁村文化協会「現代農業・増刊」編集長、甲斐良治氏と(株)ふるさとネット「ふるさと情報館」代表、佐藤彰啓氏であった。ここ100年、日本人が忘れていた「農」が見直され、「帰農」がキーワードであり、農業と農的な暮らしは、驚くべき広がりを見せているとコメント。また都市の人が、田舎に入っていくには、価値観を変える必要性も説かれた。そして、食と農に自らたずさわったライフスタイルをつくってほしいと結論が出された。

10 日本の農業の再生と棚田



分科会⑩は、日本の農業を見る視点を変えようというものであった。コーディネーターの宇根氏は「日本の農業はつぶれるが私の農、あなたの農はつぶれないだろう」と提唱。棚田サミットで生まれた「お金にならない豊かな世界」生産性がなくても、田んぼは必要」という「棚田の思想」こそが、平地地を覆い尽くすだろうとも。棚田デカップリングといった政策が必要で、102の項目(例…生きもの調査に対して、伝統技術に対して、あぜぬりに対していくら……など)が議論され盛り上がった。

お金にならないものにお金を出す
棚田デカップリングを!

分科会

10に分かれた分科会であったが、それだけ棚田が多様な課題を抱える方、さまざまな切り口から、多様な人々が棚田にかかわっていただけることも確認できた。

9 棚田景観の保全と活用



外の目が地元の景観への意識を育む
が、景観保全の負担は大きい

分科会⑨のテーマは、景観。話題提供者に、鴨川市出身のカメラマン水田稔氏、環境コンサルタントの松本清氏が招かれた。立場によって棚田景観に対する見方も異なるとし、鑑賞する立場、整備する行政等の立場、そして農家といった三者の立場で景観を検証。農家にとっては、景観保全は負担が大きいゆえ、景観に対して対価を払う案も出た。その一方、外の目が地元の景観に対する意識を育むことも話題になった。今後、地域の活性化にどうつなげていくかが課題と確認された。

3日目(9/1日)

最終日、3日目は第2部。会場を大山千枚田に移し、市民を中心に、さまざまなイベントが行われた。

3日目、棚田フェスタ2002が開幕

第2部は、2日目の夜から開幕した。まずはふるきやらシネマ制作のミュージカル映画「走れ!ケッタマジン」の上映がなされた。そして3日目、人々は、まだまだ暑い陽差しが照りつける大山千枚田につくられた特設ステージに集まった。今回のサミットのためにつくられた棚田ダンス「ルート」をはじめ、棚田に捧げるフラ・カヒコ(フラダンスの古典)や釜沼神

楽保存会による神楽などが行われ、賑わった。

そのほか、大山千枚田棚田オーナーでもある法政大学の大学生たちの手によって「棚田環境大学」が1日開校された。この報告をもって、「大山千枚田スタンプラリー」をはじめとするプレイイベントも含め、暑くて熱い第8回全国棚田サミットは、無事終了した。



上:1日棚田環境大学のようす
下:3日目の大山千枚田の参加者は1200人。大勢で賑わった。

2003年
2004年

第9回全国棚田サミットは、岐阜県恵那市
第10回全国棚田サミットは、佐賀県相知町
で開催

2003年第9回全国棚田(千枚田)サミットは、岐阜県恵那市で開催されます

岐阜県恵那市での開催は、2003年9月5、6日が予定されています。恵那市から棚田の紹介が届きました。来年も乞うご期待!!

1、恵那市の概要

当市は、岐阜県の東南部に位置し、名古屋から60km、JR中央線・中央自動車道を利用して約1時間の距離にあり、最近では首都圏機能移転候補地にもなっています。観光面では、県立自然公園恵那峡をはじめとして周辺には馬籠・妻籠に代表される木曾路、日本大正村等のたくさんの観光スポットがあります。

この中でも、大正13年に日本最初のダム式発電所大井ダムが建設され、ダム湖とその両岸にそびえる奇岩により、美しい景観を作り出した恵那峡には、毎年多くの観光客が訪れています。

市街地は、江戸時代中山道69次の46番目の宿場町大井宿として栄え、今でも古い町並みや多くの史跡があり、往時をしのばせています。平成13年には、中山道69次の浮世絵版画を中心とした「中山道広重美術館」が中心市街地のシンボルとしてオープンしています。

先人達が築いた文化的遺産で



ある「坂折棚田」が日本の棚田百選に認定され、当市のシンボルとして、整備保全の取り組みが進められています。

このように当市は、「いきいき田園交流都市」を掲げ、恵まれた環境を生かし、自然と都市機能がバランスよく調和したまちの実現を目指しています。

2、坂折棚田の概要

坂折地区の面積は19・0ha
棚田の面積は14・2ha
棚田の枚数は468枚
棚田の所有農家は35戸(うち、不在農家4戸)
棚田の傾斜 1/4~1/7

3、坂折棚田の特徴

(1) 特徴は、石積みで造成された棚田です。黒鉄(くろくわくろこ)と呼ばれる江戸時代から大正期まで活躍した石積み職人による、「谷落し」と呼ばれる技術で石を積んだ斜め積みみの石垣も見られます。

(2) 坂折地区は、地表水がすぐ近くに存在すること及び地下水も豊かで、いたる所で地下水が滲み出ており、水温の低い湧水(清水)が直接水田に入らないよう「手あぜ」と呼ばれる水路により温められた水を用いるとして利用しています。また、地下水の伏流水に関わる暗渠と清水口が、いずれも石組み構造として設けられています。

4、坂折棚田を利用した地域住民活動

(1) 棚田稲刈り体験ツアーの開催。
(2) 県立恵那農業高等学校の生徒による農業体験実習の実施。
(3) 市立中野方小学校の児童による農業体験学習の実施。

(恵那市農林課 大鏝元記)

Topics

福岡県星野村棚田調査中間報告

「ミニシンポジウム」星野村の棚田はすごい!!

8月23日(金)、福岡県星野村で、棚田調査ミニシンポジウム「星野村の棚田はすごい!!」が開催された。このミニシンポジウムは、文化庁・文化財国庫補助事業「民俗文化財「棚田調査」の中間報告として行われた。調査は、村全体の棚田を対象に、昨年度から3年間の計画でスタートし、棚田の価値を探り、保全活用を生かしていこうというものである。今回は、調査の中間報告を兼ね、村内の棚田保全への関心を高め、また棚田調査にも興味をもってもらおうということがねらい。会場には、村内外から175人が集まり、明らかになりつつある星野村の棚田の価値・魅力について、耳を傾けた。

パネラー(報告者)は、春山成子(東京大学助教授)、加藤仁美(九州芸術工科大学教授)、服部英雄(九州大学教授)、飯沼賢司(別府大学教授)、段上達雄(別府大学教授)。コメンテーターとして大島暁雄(文化庁主任文化財調査)、アシスタント、石井里津子(ライター)、司会を栗秋恵二(村教育委員会次長)が務めた。

シンポジウムは、地元、椋谷小学校5年生全6人による棚田紙芝居「棚田かいこんのひ」の上演ではじまり、地元の、広内・

各パネラーからは、景観や地質などの自然環境。水利やその組織。水利から見る開墾史。地名等から見る歴史。民具や石垣といった民俗など、さまざまな視点から、星野村の棚田の価値や魅力が話された。

どの報告からも「星野村の棚田はすごい」。そんな感想が出てきた。来年度の調査終了後には、調査報告として、村内外に向けてシンポジウムが開催される予定になっている。



座談会

富山県立中央農業高校 みんなが語った

「棚田を守り隊」の

富山県の高校生が、棚田を守るボランティア隊「棚田を守り隊」を結成した。昨年と今年の2回、棚田に出かけ、草刈りを行った。高校生が授業でも棚田を学び、実際に保全活動をはじめたのは、全国でもここだけだ。彼らは何を思い、なぜ棚田に足を運んだのか。今回、座談会を開いてもらった。活動内容から、ニッポンの農業まで、14人が2時間近くにわたって、語り合った。高校生たちのメッセージは、実に熱かった。

棚田を知らなかった。でも僕らにできることを、やりたかった

室井教諭…まず、「棚田を守り隊」で、暑いなか、誰一人バテず、草刈りを行った。その感想を聞こうと思いますが、どうでしたか？
元起一志…まず、疲れた。
石黒大輔…心地よい疲れ、かな。
高橋義典…棚田というものを全く知らなかったので、行って、びっくりした。ほんとに自然環境のなかにある田んぼで。お年寄りが、こんな急な斜面で年に何回も草刈りやってくるんだなって。
水上裕太…棚田での草刈りはやったことなかったけど、思ったよりうまくできましたね。
船山良太…僕は間違えて、ミヨウウガを切りました。手伝わつてもりが逆に手伝ってもらいました。
浦田智昭…むずかしかった…。実習でやっているあぜ草刈りとは、ぜんぜん違った。傾斜が違う。
石黒大輔…そう。傾斜も違うし、量が違う。角度がすぎたなあ。

高橋義典…今年は、斜面の途中に足場なくて、踏ん張りながら機械を動かしたので、去年よりむずかしかったかな。斜面に対し、水平に機械の歯をあてなきゃならないから、機械を斜めにするのがむずかしい。機械回つとるし、危ない。
室井教諭…そうそう2年目の人もいるよね。去年、3年生中心だったのに、どうして2年生ながら、3年生に混じって一緒に活動しようと思ったの？
高橋義典…オレの場合は、3年生の「棚田を守り隊」を提案した先輩と話す機会があって、「ついて来いよ」って。先生からも誘いあったし。うちも農家だけど、普通の田んぼしか知らなかったから、棚田っていう山のなかにある、昔からのものを見てみたかった。
元起一志…僕も興味あったし、いまの高校生にできることって、なかなかない。手伝うことぐらいかなって。何もできないけど、田んぼから実習でやってる草刈りならまかせてくれという感じ……。
荒木一也…僕は、興味心、好奇心

〔座談会参加者〕

- △司会▽
室井康志教諭
- △3年生▽
石黒大輔（団長）
高橋義典（副団長）
荒木一也／浦田智昭／上村拓司
竹森文哉／廣田陽一／藤田純一
前田佳紀／水上裕太／元起一志
元起友昭／盛安達郎
- △1年生▽
船山良太



富山県立中央農業高校「棚田を守り隊」

活動記録

38℃。猛暑下の棚田で、草刈りボランティア!!

活動の発端は、平成12年（2000年）。富山県立中央農業高校、室井康志教諭が、農業科「作物」の授業の中で、棚田のもつ多面的機能を取り上げ、環境保全に棚田や農業が深くかかわっていることを生徒たちに伝えたことからはじまった。

さらに、授業の一環で、2001年2月富山市で開催された「棚田シンポジウム」を聞きに行っただことも大きく影響したのでそうだ。こうして棚田を学んだ3年生15名が中心となり「農業を学んでいる自分たちができることはないか」話し合った。そこから草刈りボランティアを行う、高校生による「棚田を守り隊」が誕生した。

記念すべき活動第1回は、2001年7月27日、富山県八尾町三乘地区で行われた。「隊」を発足



させた3年生を中心に2年生も加わり、自分たちで草刈り機を持参しての草刈りとなった。棚田6ha分のあぜ、法面を切った。38℃の猛暑のなか、県庁職員や地元を巻き込み、参加者は50名を越えたという。自前で作成した幟と、黒字に白で「棚田を守り隊」のロゴが入った、お揃いのTシャツを着ての活躍は、地元のメディアを賑わした。

第2回目は、今年8月9日、地元大山町で実施。今度は総勢70〜80名の参加者が集まり、再び猛暑のなか汗を流した。「棚田を守り隊」の活動は、地元農家に元気を投げかけている。「来年も頼むぞ！」そんな声も出たのだそうだ。「棚田を守り隊」高校生軍団は、地域の頼もしい若人として期待が集まっている。

が一番だった。棚田ってどんなものかわからなかったから、刈ってみたいなど。行ってみたら相当スゴかった……。法面の角度も、刈る面積も広くてびっくりした。予想以上に広がった。

藤田純一…僕も、棚田見たことなかったし、どんなところか見てみたかった。やっぱり、やってみたかったからかなあ。

元起友昭…僕も興味あったし、自分が人のためにできることだから。草刈りなら、参加しやすいと思った。しかも、先生が授業で棚田が減ってきていると話していたから、農業関係の身近な部分でやってみたいと思いました。

前田佳紀…他にもいろんなボランティアあるけど、農業関係のボランティアやりたかったし、じいちゃんばあちゃん、楽させてやる！こんなオレやけど、どうぞ使ってくれ！そんな気持ちだった。

棚田ほど、人を惹きつけ、人を集める力のある田んぼはない！

室井教諭…じゃあ、なんで棚田を守っていかなくちゃいけないの？

みんなはどう思う？

船山良太…棚田は、昔から受け継がれてきた伝統的な、重要な文化だから。土砂崩れの防止にもなるし、水も溜めるし。

前田佳紀…緑のダムだからね。

竹森文哉…いっぱい生き物が生息しているからね。



室井教諭…下の田んぼにも生き物いるけれど、棚田とどう違うの？
上村拓司…棚田が、下の田んぼと違うのは、あまり農薬使っていないからじゃないかな。下の田んぼは無農薬といっても、周りからも農薬が来るし、周りはビルや家とかあって、生き物は住めないと思う。
船山良太…棚田では、稼ぐというより、自分たちの食べる分をつくらせているから、農薬が少ないんじゃないですか？

高橋義典…棚田は、自然のダムなんです。山が、山に降った雨を地下水として溜めるのと同じ。棚田があることで、土砂崩れがなくなる…。最近新聞で、都市の人が田んぼを借りるといった記事が出ています。とくに棚田が目につく。つまり、棚田は自然のもの、という意識がみんなにあるんじゃないかな。そういう意味でも守りたい。

ていかなきゃならないと思う。
室井教諭…都会から、田植えや稲刈りに来るって確かにあるよね。なぜ、棚田に来るんだろう？

石黒大輔…昔の日本みたいだからじゃない？ 懐かしい感じ。
元起一志…山の空気を吸いに。

高橋義典…都会の人は、農村に憧れ、農村の人は都会に憧れる。でもそれは実現しないから、農村にたまたまに出かける。家族の時間というか、親子の交流にも、農村は良い場所なんじゃないかな。

石黒大輔…自分で作物をつくる感動がある。食べる感動も。またそこで、仲間ができる感動もある。
高橋義典…棚田にやってくると、全国のいろんな地域の人と知り合いたい。いろんな話ができるし、交流の場でもあるよね。

室井教諭…棚田では、昔の田舎の体験ができるし、田舎に憧れる都会の人にとって、交流ができ、癒しの場になるといっていいかな？

前田佳紀…癒しというより、なごみじゃないですか？

石黒大輔…そ、時間の流れ違う。都会はだーっと過ぎるけど、田舎はゆっくり。

前田佳紀…都会って、機械ばかりだし、すぐキレるとか問題ある。やっぱり、棚田は必要でしょう。

船山良太…芸術という面でも、大事だと思えます。棚田は、俳句があったり、カメラマンが写真撮ったり、絵を描いたり。普通の田んぼでは、描く気にならないんじゃないですか？

ないですか。棚田は、心揺さぶられるものがあるからだと思う。心動かされるものがあります。僕もきれいだなんて思いますから。

棚田を守るために、「棚田守り日」や「山の日」なんてあっていい

室井教諭…じゃあ、棚田を守ることできたら、日本の農業、環境はどう変わっていくだろう？

高橋義典…環境が良くなるんじゃないかな。自然のダムを守ることによって、不要なダムをつくらなくてもいいし、地下水も豊富になる。水もうまくなる。薬も使っていない自然の水を自然のままにおいしく飲めるようになるっていいかな。

元起一志…棚田を守っていったら、それは、農業技術が発展しているのを停滞させてしまうかもしれない。棚田は、作業効率はすごく低いと思うけれど、自然の中にある、環境に良い農業をしている場所じゃないかな。環境的な視点で見ると良いこと。その分、日本中の人が、棚田に集まって、作業効率を力バースればいい。日本中のみんなが集まったらいい。

室井教諭…作業効率が悪いからこそ、みんなが集まってやればいい。そうすれば、会話や交流も生まれ、家族の交流も深まる、といったことで、話がまとまってきたね。

高橋義典…いま、コンピュータの時代で、ひきこもりとか多いけど、自然のなかに連れていって、そこで

いるんならに出会う。社会復帰につながるんじゃないかな。

元起一志…日本中で棚田守る活動をやって、総理大臣に頼んで「棚田守り日」つくるって（みんな爆笑）、1週間くらい棚田に行く。

高橋義典…で、みんな棚田やって「自然愛護日」みたいに、その地域の自然をぜんぶ守って……。

元起一志…それを日本の特色にしてしまえばいいんじゃない？

石黒大輔…「海の日」があるんだから、「山の日」あつていいよ。「山の日」つくるよ！

室井教諭…一志君はいい、棚田には人を集める力があるっていったね。棚田を守っていけば、どうなる？人が集まればどうなるの？

石黒大輔…人が集まれば、ムラが豊かになる。潤って……。

元起一志…活性化する。発展していく。出て行った人も戻ってくる。石黒大輔…ムラも元気になる。ムラも守られていく。

室井教諭…だから棚田って大事なことかな？ 環境も守ってくれるし、人を集める力があるから、ムラも元気にしてくれるってことだね。

船山良太…農業産業は低迷しているけれど、棚田での農業は、それをくい止めてくれると思います。

環境に配慮した農業こそ、

日本の農業の未来はある

室井教諭…さて、盛り上がりつつあるわけですが、ニッポンの農業、



棚田の未来、みなさん、どんな思いをもっていますか？

高橋義典：農業は、自然に戻るべきですよ。いま、化学肥料とかで収量を多くし、農薬をバンバンまいている。作物も中国でつくれば良いという人もいる。農業高校もなくなってきた。何十年経つてから、気づいても遅いと思うんですよ。これからは、安全を重視して、見た目より味を目標にして、進んで行くべきだと思いますね。

元起一志：オレ的には、いま農業は注目されているというか、都会の人から見ると憧れもあると思うんですよ。なのに、この辺りの農家の子もたちは、農業をダサイとか、古い、イモくさいとか思っている。

ている。(みんな爆笑) これからは、農業やってるってカッコイイってなるよ。

石黒大輔：これから、農業が一番大事になってくると思うよね。人間食べていくのが基本でしょう。自然全体を守っていく農業やらんと人間は生きていけない。

前田佳紀：そこで、オレらが研究している、農薬を使わず、米ぬかペレットを使うことで、除草の間を省いた有機稲作農業。これを日本の中心にして、世界でも先陣切ってやっていくのがいい。

石黒大輔：まずは、自分たちから**船山良太**：日本は、外国の米を輸入していますよね。外国の米は安いから、安さで外国と闘うと負けです。だから、日本は、お米をブランド化して、味で勝負していくしかないと思います。

前田佳紀：外国の農産物に量や安さで負けるなら、有機といった、質しかない。

元起一志：いまの経済事情だと、高いものは買えないと思う。でも、農薬をまいた後、くさい。あれイヤですよ。あの臭い嗅いだら、あれがかかったお米かと思うと、食べる気しない。あの臭いを日本中の人に知ってもらわなきゃと思う。

盛安達郎：最近の農家は、農薬を使いきるんです。

高橋義典：これから、安全なものを消費者は求めていくと思う。有機や安全な農業にもっと自信をもって、出していくといいよね。

前田佳紀：たとえば、野菜は、水や肥料をやらず、本来のうま味を取り戻すという方法で品質を上げているでしょう。稲作の場合は、米を使って米を育てるといった有機稲作農業が、これからのモデルになるんじゃないかと思う。

室井教諭：なんで、農薬使うかっていうと、楽なんだよね。でも、君たちが春から取り組んだ有機農業だけど、有機ってものすごくたいへん、労力がかかるっていうイメージがあるけど、どうでした？

実際、田んぼに入りましたか？

みんな：いや、入ってない。草取りにも入ってない。調査だけ。

室井教諭：それなのに収量が8・5倍／1反。それだけの収量があった。そして一等米。有機は決したいへんじゃないってことがわかってもらえたと思う。

「農業経営者って日本の宝じゃなくないかな」

室井教諭：ほかに、こうあるべきとか矛盾を感じていることない？

上村拓司：いま、会社の役員とか偉い立場にあった人が、イターンでわざわざ農業しにやってくる時代なのに、農業後継者がいないというの、どういうことかと思う。

前田佳紀：農家は、人間が食べるものをつくつとるのに、昔から立場的に低い気がする。食べものなぐちゃ、人は生きていけないのに、ひどい仕打ちをしていると思う。



農業経営者って、日本の宝じゃないのかな。

高橋義典：研修で出会った25歳の人が、農業したくても、非農家の人は、土地の入手がむずかしく、農業できないって、いつてたんですよ。非農家の人にも、農業ができる良い道があればいいと思う。

前田佳紀：いま、なぜ農業が大切か、みんなに思い出してほしい。大切さを思い出してくれた人は、田んぼもってないなら、棚田に行って手伝ってほしい。なぜ農業が必要か知らない人には、棚田をアピールして、実際に田んぼに行くと、農業の大切さ知ってほしい。

高橋義典：減反、減反やし。元起一志：いや、最後に農業は強い！いま、棚田のことが広まってきているから、これを機会に、日本の農業の、この暗い感じが少しでも明るくなればいいと思うな。

船山良太：農業は、人間が環境に対してマイナスにしたものをプラスにする仕事。それをみんなに知ってほしいです。

室井教諭：そうですね。みんながいうとおり、農業学校も減っている。農業は、すべての学問の基本的な学習なのに、こんな大事な学問を、目先のことだけでなくして

いくのが、残念に思うよね。

元起一志：オレんちでは、「農家にとつて、田んぼは、一番の宝物だ」といわれてきた。日本にとつて、

農業経営者って、日本の宝じゃないのかな。

かもしれないけど、農業好き、楽しいという人、増えていったらいいと思う。そういうことがわかってきたから、都会から逆にやってくる人がいるんじゃないかな。みんなに農業を好きになってほしい。

元起一志：そのためにも、魅力のある農業をやらないと。農薬を使ったような農業やっていると、やりたくなくなるんじゃない？ 若い人が、惹かれないんじゃないかな。

前田佳紀：実習とか、学校の授業で、どんどん農業体験をやった方がいいよね。少しでもやったら、興味もって、農業をやってくれる人が出てくると思う。

室井教諭：今日は、みんなどうもありがとう。いろんな意見が出て、良い座談会になりました。

事務局 ニュース

事務局、石川県輪島市
からのお知らせコー
ナーです。

8月30日～9月1日、千葉県鴨川市において開催しました「第8回全国棚田(千枚田)サミット」では、会員の皆様をはじめ全国から3300人以上の方にお集まりいただき盛会に終わることが出来ました。

準備いただいた鴨川市長以下行政関係者の皆様、地元大山千枚田の保存会の皆様、棚田を愛し協力していただいた分科会講師や一般参加者の皆様、本当にありがとうございました。

棚田保全の意義と必要性を広く国民に訴えることを目的の一つとして、高知県梼原町で開催されたサミットも今回で8回目。

「棚田と都市・保全と共生」をテーマに、首都圏に最も近い棚田がある鴨川市でのサミットは、これまで一步一步着実に進めてきた当協議会の活動を、更に多くの方々を理解していただき、今後の飛躍に繋がる大変有意義なものであったと思っています。

「堂本暎子」千葉県知事が基調講演の中でお話されたように、田んぼは生物多様性の宝庫であり、田んぼを守らないことには生物が減び、しいては人間までもが

生命の危機に陥るといつても過言ではないでしょう。利便性のみを求め、その本質を見失うと将来大変な目に遭います。昨年の輪島サミットで、「富山和子」立正大学教授が農林漁業トータルで保全しなければダメと言われましたが、今回の堂本知事のお話を聞いて、全てのキーとなる水、そして棚田の大切さをあらためて感じました。

また分科会では、盛りだくさんのテーマで活発な意見交換を行っており、今後の棚田保全に繋がるヒントを得た方もおられたのではないのでしょうか。

更に今回のサミットの特徴として、行政から離れ、保存会を中心とした独自のイベントをサミット第2部として開催しており、ミュージカル映画や創作ダンス等で棚田に集う方々が交流を図っております。

鴨川市で作成中ですが、今回のサミットの報告書を楽しみにしたいと思います。

輪島市では昨年に引き続き千枚田結婚式を行いました。また肥前町では第5回の棚田ウォークを開催するなど各地で棚田に関する様々なイベントが行われています。棚田の歴史や文化、その実態等を研究する「棚田学」や、今年NPO法人となった棚田を愛する方達の集まり「棚田支援市民ネットワーク」等の団体もあります。オーナー制度による

いろいろな交流も広がっています。確かに棚田が抱える問題は大きくその保全は楽ではありませんが、残さなくてはなりません。このような運動が続く限り絶対になくなりません。先代が英知を結集して造り上げた棚田を後世に引き継ぐことが我々の責務です。

来年は岐阜県の恵那市でサミットが開催されます。また、今後の交流や取り組み状況等を報告したいものです。

最後に当協議会のホームページを一度ご覧下さい。各地のオーナー制度等も載せてありますが、訂正・追加又はご意見をぜひお寄せ下さい。

そのほか、先の総会で各地で棚田保全に取り組んでいる方々との交流をしたいとの意見がありました。今後交流会等催し物がありましたらホームページでお知らせしたいと思いますので事務局までお知らせ下さい。

(先号にも掲載しましたが、会員も随時募集しております。人の輪を広げましょう。住所変更も併せてお知らせ下さい。)

協議会HP = <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

平成14年度事務局

石川県輪島市役所

本器観光課 担当：大西

☎(0768)23-1146

FAX(0768)23-1855

お便り テラス

拝復
本日は、ライステラス第26号をご送付頂き、本当にありがとうございました。私は、読者あつてのライステラスだと思っております。編集部のおしつけのライステラスでは、効果はないと思います。情報を求めていることでしたが、それも大切でしょう。時には、読者(会員)の求めるライステラスは、何なのかとアンケートをとってみてはと思います。会員の反応がないとのこと。少し不思議です。ライステラスを資料として、一度紙面討論会でも企画して下さい。こよなくライステラスを愛する一人として、今回は要望、意見を記しました。
犬塚 雅敏(静岡県・正会員個人)

募集します!!

あなたの声をお寄せ下さい。

テーマ①..わたしが暮る棚田ライステラス
テーマ②..わたしが考える棚田保全

テーマ①②とも、自由スタイルでお書きください。短く一言でも結構です。締め切りは、2003年1月末日。29号以降に掲載を予定しています。掲載の都合上、文字数を調整させていただきます場合もございます。ご了承ください。名前、住所、電話番号(協議会会員の方は、その旨明記してください)、職業、年齢(年代)をお書き添えの上、郵便、もしくはFax、またはメール(Ecranada@aol.com)にて「ライステラス」編集部までお送り下さい。お待ちしております。

編集後記

今回も全国棚田サミット、盛り上がりしました。交流会のにぎやかさは驚くほどで、人々の交流が年々盛んになってきたことを痛感いたしました。サミットそのものは、それはもう充実した内容で、すべてをまじめに聞こうと努めたわたくしは、最後はバテバテになってしまうほどでした。さて、わたくしは、新潟の農家へ秋の収穫の手伝いに行くのが近年の恒例となっていますが、手伝いというのは名ばかりで、いつも体験の域を超えず、技術の習得はまだ遠い先ようです。みなさんは、棚田の新米を口にされましたか? 最近は、各地域で、棚田米を売り出しているところが増えています。お好きな地域の市町村にお問い合わせなさってはいかがでしょう。ライステラスでも、こしばらく棚田米紹介をしていますが、今後、企画を検討していきたいと考えています。次号28号は、新年のご挨拶とともにお届けする予定です。お楽しみに。

石井里津子

会員 募集中

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田(千枚田)連絡協議会
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
石川県輪島市役所漆器観光課内

〒928-8525 石川県輪島市二ツ屋町2-29
TEL:0768-23-1146 FAX:0768-23-1855
協議会HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>